歴史よもやま話　その 26

江戸無血開城、影の立役者、篤姫と和宮

戊辰戦争のとき、西郷隆盛と勝海舟が田町の薩摩屋敷で会談して江戸無血開城を決め、江戸の町を戦火から守ったという話は大方の人が知っている。

この会談に先立ち、勝海舟の要請を受けて、山岡鉄舟が官軍東征軍参謀・西郷を駿府に訪ね、根回ししたことも前号（歴史よもやま話　その 25）に書いた。

しかし、官軍の江戸城攻撃を阻止し、江戸の町を火の海から救った影の立役者が居たことは案外知られていない。天璋院・篤姫と皇女・和宮のことである。

天璋院・篤姫は、薩摩藩の分家・今和泉島津家の生まれだったが、当時の薩摩藩主・島津斉彬の養女となり、徳川１３代・家定の正室となった。家定は生来病弱、結婚後間もなく逝去する。

一方、皇女和宮は孝明天皇の妹、親子内親王だった身が、江戸幕府凋落を防ぐ苦肉の策・公武合体の一環として徳川１４代・家茂の正室として降嫁した。

家定の夭折で若くして寡婦、天璋院となった篤姫のもとに、義理の息子・家茂に嫁いできた和宮、当初は武家と宮廷のしきたり・文化の違いから江戸城大奥において、様々な軋轢があった。しかし、やがてはお互い夫を亡くし（家茂は大坂城で病死、和宮は結婚二年後に寡婦に）嫁姑の垣根が無くなる仲になったといわれる。

鳥羽・伏見の戦いで敵前逃亡し、大坂から艦船で江戸に逃げ帰った 15 代将軍・徳川慶喜が、天璋院と面会し、和宮（静寛院宮）に取り次ぎを願う。始め和宮はこれを拒否するが、徳川家存亡の危機であるという天璋院の説得を受入れ面会する。

慶喜は朝廷に徳川家存続嘆願を奏上する書状を和宮に托し、彼女はその書状を修正の上、土御門藤子ら女官を京に派遣、東海道鎮撫総督で、叔父にあたる公家・橋本実麗とその息子・実梁に届ける。

しかし、朝議はあくまでも徳川征伐を主張する薩摩藩に押切られ、有栖川宮熾仁親王を東征大総督、西郷隆盛を参謀とする官軍の東進が決定された。

一方、天璋院・篤姫は、西郷隆盛に宛てた書状「官軍隊長宛・嘆願書」をお付き女房・幾島に届けさせる。

西郷は自らを取立ててくれた島津斉彬には恩義を感じており、その養女である篤姫の願いを無視することができなかったという。

そして駿府における山岡鉄舟の予めの根回しと、薩摩屋敷における西郷・勝の会談により江戸無血開城が実現する。

篤姫、和宮二人とも実家が嫁ぎ先を滅ぼそうとするなか、一致協力して江戸の町と徳川家の存続を守ろうとした。

篤姫は江戸城開城の前、一橋邸に退去、紀州藩邸など転居しながら、御三卿田安家の長男・亀之助（徳川 16 代家達）を養育した。享年 71 才。

和宮は明治 2 年京都に里帰り、明治天皇に拝謁するなどした後、東京に戻ったが持病の脚気が悪化、箱根塔ノ沢に療養するも快癒せず、この地で逝去する。享年 31 才。